



平成24年9月24日  
内閣府（防災担当）

## 南海トラフの巨大地震モデル検討会（第22回）議事概要について

### 1. 第22回検討会の概要

日時：平成24年8月1日（水）15:00～17:00

場所：中央合同庁舎5号館 防災A会議室

出席者：阿部座長、岡村（行）、金田、島崎、平川、平原、古村、翠川、山岡、山崎の各検討会委員、佐々木官房審議官 他

### 2. 議事概要

津波計算等について、事務局から説明を聴取し、委員間で議論を行った。今回の議事の概要は次のとおり。

- 堤防を津波が乗り越えた時に破堤する状況の方では浸水し、始めのうちから堤防がない条件では浸水していないものがあり、確認が必要。
- 津波の浸水計算でゼロメートル地帯であるにも関わらず浸水域が小さい場所がある。堤防が破壊される条件がこれまでと違っている影響であるかどうか確認が必要。
- ここで新たに議論する強震断層モデルの考え方で重要なのは、最初に強震動生成域のサイズと応力降下量を決め、次に震源の全体像を定めるという方向である。こうして作成されるモデルは、いわゆるセグメントモデルとなりスケーリングモデルとはならないが、それで良いか。
- 大事なポイントは、最新の知見に基づいたところではないか。応力降下量も津波断層モデルとも整合がとれる。
- マグニチュード9の巨大地震の震源モデルの作成手順の考え方がまだ定着しておらず、これまでいろいろな議論があった。3月に提示したモデルは、従来のマグニチュード8クラスの震源モデルの作成手順を準用したものであった。最新の考え方では、強震動生成域の場所と応力降下量を与えて、マグニチュード9の地震の全体像をつくるのが一般的である。その新しいやり方でマグニチュード9のモデルを作り、東北地方太平洋沖地震の観測データに良く適合することが確認できたので、これを採用することにしたという考えで良いか。
- 上盤効果等で震源のそばでは震度の距離減衰の平均的なカーブより、1.5～2.0倍くらい地震動が強くなるということが言われている。計測震度にして0.5前後くらいは大きくなる。そういった目でどれが整合しているかということだが、パラメータCの値については、はっきりした値を決定することは難しい。今回の計算では暫定的に決めたことを説明する必要がある。
- 1707年宝永地震と1854年安政東海地震・安政南海地震を同程度の大きさの津波としているが、地域によっては、1854年安政東海地震・安政南海地震の津波に比べ1707年宝永地震がかなり高くなっているところもある。同程度の津波と考えるという説明は分かりづらい。

○防災の観点から見ると1707年宝永地震も1854年の安政東海・東南海地震も検討対象とすることが望ましいとすれば良いのではないか。

<本件問い合わせ先>

内閣府政策統括官（防災担当）付

調査・企画担当参事官 藤山 秀章

同企画官 若林 伸幸

同参事官補佐 下山 利浩

TEL : 03-3501-5693（直通） FAX : 03-3501-5199